

## 遺児へのグループによるグリーフケアプログラムの効果測定 (H29-R2)

研究課題番号：17K18248 研究代表者：倉西 宏 京都文教大学、臨床心理学部、准教授

(概要) ※2017-2018 の実績報告書より

### 1. グリーフケアグループの意義に関する検討

遺児大学生へのグループと個別面接によるグリーフケアの意義について、自死遺児大学生に焦点を当てて事例的に検討を行った。グループ実施前後に複雑性悲嘆質問票と半構造化面接を行い、グループ体験と共に検討した。複雑性悲嘆質問票の結果から、グループに参加することで二重過程モデルに類するプロセスを経ながら悲嘆が軽減することが見出された。語りからは、死別した親との関係性にも変化が生じ、自身の人生の物語の中に親との死別体験が含みこまれるようになることがわかった。それらと並行して死別体験の意味が変容し、死別体験というものが自身を苦しめる「傷」というものから、「個」を生み出すものであるという受けとめに変化した。つまり死別体験に取り組むことは悲嘆を軽減し、その体験の意味を変容させるだけでなく、遺児自身全体である「私」を変容させることになるのである。これらから死別体験の再構成と「私」全体の変化とは平行して生じ、相互的に影響を与えることが示された。

### 2. グリーフケアのボランティアスタッフ体験に関する検討

あしなが育英会が実施した遺児への心のケア活動に参加したボランティアスタッフの参加アンケートの分析を行った。中でも初参加のスタッフの体験に焦点を絞って検討を行った。また、参加体験を検討した上でスタッフに必要な事前研修・事後研修の内容を検討した。そこではボランティアスタッフは遺児という存在に対して主観的イメージを抱いていたが、実際に関わることでリアリティある遺児の実像を捉えることができ、遺児と真に出会うことができた。さらに、ボランティアスタッフであるため、専門性が不足していることが見出されたが、同時に専門家でない存在であるからこそできることがあることについても考察を行った。その非専門家が持つ力を如何に育むかが、事前事後研修において重視する必要があると考えられた。

遺児へのグリーフケアプログラムについて検討を行うために、2018 年度は以下の研究に取り組んだ。グリーフケアグループに関する自死遺児大学生の事例研究では、遺児大学生を対象とした「親との死別体験をわかちあう会」の効果研究を行った。そこでは、複雑性悲嘆質問票においてカットオフ値以上だったものがカットオフ値以下へと悲嘆が軽減することが示された。さらに悲嘆の数値的側面の変化だけでなく、遺児大学生自身が死別を自身の「個別性」として認識できるようになることが見出された。つまり死別体験に取り組むことで、悲嘆の軽減とともに遺児大学生の在りよう全体に変容が生じたと考えられる。また、その喪失後のプロセスにおいては弁証法的プロセスが生じることも併せて見出された。

次に、遺児支援団体におけるケアプログラムへのボランティアの体験とボランティア養成のための研修について検討を行った。そこではボランティアに初めて参加する者を対象とした。ボランティア希望者においても、実際の遺児に会う前は遺児が傷ついた存在であると強く認識してしまうことで、ある種の偏見を抱いていることがわかった。そこから実際に遺児と関わることで、遺児は困難性を抱えつつも一人の子どもであるということを理解できるようになり、遺児という視点と共に子どもという視点からも理解できるようになることが見出された。これらからも、遺児支援のボランティアにおける事前研修において、遺児の困難性だけを理解するのではなく、事例的な検討等も含めた実際の遺児理解を促進することが重要であることがわかった。

またその他にも離婚による両親との離別体験、さらに離婚による離別後に死別に至った事例研究も行った。そこでは死別体験の中でも近年注目されているあいまいな喪失について、弁証法的過程が生じることを見出された。